

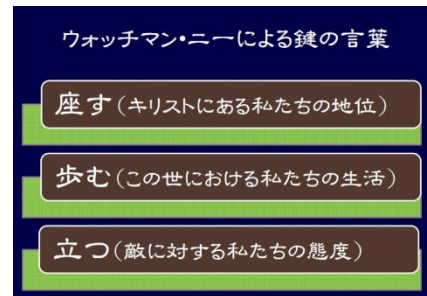
第 24 回目 召しにふさわしく歩む



はじめに

●エペソ人への手紙は6章からなっていますが、その構造はきわめてシンプルです。大きく二つの部分からなっています。その二つとは、<前半> <後半>です。前半は、私たちがキリストにあってどういう立場にあるか、どういう者とされているかということが記されています。後半は、それに基づいてどう生きるべきか、具体的な歩み、生き方が記されています。どちらかという、後半の部分が具体的で分かりやすく、そこから読んだりする人が多いのですが、実は、逆です。前半の部分がよく理解されていないと、後半の部分を「歩む」「立つ」ことができないということになっているのです。

●ウォッチマン・ニーという人が、このエペソ人への手紙のキーワードを三つのことばで言い表わしたことを前にも述べましたが、もう一度復習してみましょう。それは前半のキーワードは「座す」です。すべてがそこから始まります。神がキリストを通して成し遂げてくださったところに私たちが「座す」ことです。「座す」とは何もしないで休息することを意味します。しかしこの「座す」ことは、次の「歩む」ためのものです。神はキリストにおいて、ひとつのからだ、ひとつの神の家族、キリストにある共



共同体を通して、神の夢一つまり、「キリストにあってすべてのものがひとつになる」という夢(ドリーム)を実現しようとしています。教会はそのためのドリームチームです。そのチームの一員とされた私たちがどのようにそのチームの一員として生きるべきかを記したのが、4章以降の「歩む」という部分です。ですから、そこには実践的なことが教えられています。

●今回は、その最初の部分の4章1～3節から「召しにふさわしく歩む」ということを考えたいと思います。

- 4:1 さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。
- 4:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、
- 4:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

1. 召しにふさわしく歩む

(1) 最初の接続詞が意味すること

- ① 「さて」(新改訳、口語訳)、② 「そういうわけで」(尾山訳)、③ 「だからこそ」(柳生訳)、④ 「そこで」(新共同訳)
- ⑤ 「それゆえ」(NTD)、⑥ 「されば」(文語訳)

אגרת שאול אל האפסים

●新改訳聖書の「さて」ということばは、「話は違いますが・・・」というニュアンスを感じさせます。しかし、他の聖書の訳を見てみると、前の部分とこれから書かれるべきことが密接な関係にあることが分かるような言葉「ウーン」(oúv)となっています。「そういうわけで」「だからこそ」「そこで」「それゆえ」「されば」・・・と訳されるとわかりやすいです。

●いずれにしても、ここから、いよいよキリストの共同体を建て上げるために召された者の実際の生活へと入って行きます。しかし、その最初にある接続詞が意味するように、絶えず、前半で教えられていることに立ち返る必要があります。そこが私たちの土台であり、何のために今の自分があるのかが記されているからです。車を運転する時には、前だけを見て走っているではありません。時折、後ろを見ながら走っているのです。そのように、すでに書かれている1~3章を振り返りながら、実際のキリストのからだを建て上げていく歩みをしなければなりません。それは私たちが神に愛され、神の子どもとされた者に「ふさわしく」です。

(2) 「ふさわしく」ということば

●「ふさわしく」という言葉は、天秤を意味することばです。次のような意味合いがあります。

天秤(てんびん)



- ① バランスを保っている 同じ重さをもつ
- ② 値する 似つかわしい 見合っている うまく合っている

●それゆえこれから学ぶことは、神の子とされた私たちにはとても見合った者、似つかわしい事柄なのです。ですから、心を開いて熱心に聞きとらなければなりません。時代劇のドラマで「殿、ご乱心遊ばれてはなりません」という台詞があります。殿様は殿様らしく振舞ってくださいということでしょう。皇室などにかかわる者たちはそれにふさわしい格式を身につけるために、それなりの教育を受けます。私たちは皇室の者になることはできませんが、それ以上の神の家族の一人とされています。神の家族として生きるにふさわしい者として生きることが期待されているのです。

(3) 「歩む」ということば

●「歩む」ということば、それは私たちの実際的な生活、あるいは態度を意味することばですが、エペソ人への手紙では7回ほど使われています。

- ① 召しにふさわしく歩みなさい (4:1)
- ② 愛のうちに歩みなさい (5:2)
- ③ 光の子どもらしく歩みなさい (5:8)
- ④ 賢い人のように歩みなさい (5:15)
- ⑤ (あなたがたは、かつては)不従順の霊に従って、歩んでいました (2:2)
- ⑥ 異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません (4:17)
- ⑦ 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。
神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです (2:10)

●ここで特に、最後に記されている「神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」(2:10) ということばはとても大切だと思います。「ふさわしく」生きることなんか私にはできないと思われるでしょう。しかし神がそれをできる力を備えて下さっているのです。

2. キリストのからだの一致を保つための基本的資質

●4章以下には、キリストの共同体を建て上げるために召された者の実際的な生活がいかなるものかが書かれているのです。今回のテキストにある2, 3節はその歩みの最も基本的な特質について取り上げられています。その前にもう一度聖書を読みましょう。

4:1 さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。

4:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、

4:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

●ここにあげられている特質は、私たちが身につけなければならない基本的な特質です。五つの特質が挙げられています。

●「謙遜」「柔和」「寛容」「忍耐」「平和」、この五つです。この徳を身につけていく必要があります。これらはすべてイエス・キリストが身につけていたものです。私たちがキリストと深いかかわりをもって、キリストにとどまっていくなれば、こうした徳は身につけていくことを神は約束しておられます。それが2章10節の約束です。私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。これからその一つ一つを見ていきましょう。



(1) 謙 遜

●へりくだること。その模範は御子イエス・キリスト。御子は神であられる方でありながら、ご自分を無にして、人となり、「仕える者」の姿を取られました。その一つの例は、主であり、教師であるイエスが弟子たちの足を洗ったという出来事です。当時、足を洗うということは奴隷のする仕事でした。それをイエス自らなさったのです。この世の会社ではこうはしないでしょう。逆です。足を洗ってもらう方です。この世においては「謙遜」よりも「尊大」が徳のあるように考えています。つまり「仕えてもらう」立場こそ徳があるという考えです。しかし聖書の世界は逆です。

●イエスは弟子たちの足を洗ったあとにこう言いました。「主であり、師であるこのわたしがあなたがたの足を

אגרת שאול אל האפסים

洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。・・・あなたがたがそれを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。」(ヨハネの福音書 13 章 14,15,17 節)

●私が神学校に行ったときに、特に訓練されたことは徹底的に仕えることでした。その訓練は卒業後、ある教会員が倒れた(脳梗塞)ことで、その方をお世話するという働きでした。卒業当時は、講壇でメッセージする奉仕は年に1回ないしは2回でした。主が私に仕えて下さったように、教会の方のために仕えることが私たちの仕事でした。そこで牧会ということを中心ではなく、実際的に学んだのです。実った稲穂ほど垂れ下がるように、謙遜をもって人に仕えることができるなら、あなたがたは祝福されるとイエスは言われました。この謙遜さこそ、キリストのからだを建て上げていく、一致を保っていく大切な資質であり、上から来るものです。

(2) 柔和

●自分の主義主張に固執することなく、真理に対して常に柔らかな態度を取ること。相手の売り言葉に買い言葉で返さない。感情を自制し、相手との絶妙な距離と間、バランスを取ることのできる心。

(参照・・・箴言 14:29 16:32 19:11)

14:29 怒りをおそくする者は英知を増し、気の短い者は愚かさを増す。

16:32 怒りをおそくする者は勇士にまさり、自分の心を治める者は町を攻め取る者にまさる。

19:11 人に思慮があれば、怒りをおそくする。その人の光栄は、そむきを赦すことである。

(3) 寛容

●人が失敗したときに、その非を責めないことです。また、自分が不当な扱いや批判・中傷を受けたとき、決して仕返しすることなく、赦し受け入れる心。ある人は「寛容とは、報復する力を持っていながら、報復しない心である」と言いました(参照・・・箴言 14:29 16:32 19:11)。

(4) 忍耐

●好みとか考え方の違い、失礼や無礼など。あるいは、気が利かないなど、人に対して不満を抱くことがあったとしても、愛を持って赦し、我慢し、耐え忍ぶこと。

(5) 平和

① 神との平和を保つ・・・神を赦すこと。神を赦すことができなければ、確実に、信仰から離れていきます。

② 人との平和を保つ・・・「隔ての壁」を作らない。自分が正しいと確信することの中にも危うさがあることを心のどこかで持っていること。人と喧嘩をしない。言い争わない。

③ 自分との平和を保つ・・・裏表の顔をもたない。

●最後に、こうした徳をキリストにあって身につけていくこと、しかもこれは自発的、自主的に、「熱心に求めること」が大切なのです。キリストのからだの一つの枝として、自ら、その存在が祝福されたいと願うならば、キリストの心を心として生きる以外にはその秘訣はないと信じます。

אגרת שאול אל האפסים

● 神の家族とされた私たち一人ひとりが今回は取り上げた徳を身につけることを願って行きたいものです。そして大切なことは私たちが自覚的にそれを熱心に求めるならば、それを得ることができるという約束があるということです。

● 「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださった」からです。それゆえ、聖霊様は、私たちをして召しにふさわしく歩む者となりたい、という願いをを起こさせて下さるはずです。あなたはその決心がついておられるでしょうか。一人ひとりにその決心が与えられるように祈ります。